くすの木タイム学習指導案

第４学年

Ⅰ　単　　元　　広げよう！目の不自由な方との輪

Ⅱ　考　　察

1　教材観

(1) 育成を目指す資質・能力の三つの柱

③主体的に学習に取り組む態度

目の不自由な方とその暮らしへの関心と，取組への自信をもち，新たな課題に自ら取り組む態度

①知識・技能

目の不自由な方とその暮らしの特徴・よさ
思考スキルや合意形成を図る技能

②思考力・判断力・表現力等

目の不自由な方とその暮らしについての課題を見いだし解決する力

(2) 学習内容

・学習対象：目の不自由な方とその暮らし

・学習事項：目の不自由な方とその暮らしの特徴・よさ（相手の思いを推し量り，互いに相手の思いを尊重して関わることが重要であるといった概念的な理解）
思考スキルや合意形成を図る技能
他者と関わることと，物事を多面的に俯瞰して見ることの大切さ
自分と目の不自由な方やその暮らしとのつながり

(3) 本単元の学習とその価値

本単元は，子どもたちが，目の不自由な方の暮らしを安心できるものにしようと，言葉の道案内を作って試したり評価してもらったりして，目の不自由な方とその暮らしの特徴・よさをとらえ，共生について考えていく学習である。その価値は以下のとおりである。

視覚から得られる情報は外界から受ける全ての情報のうちの８７％を占めるとされる。子どもたちは，そうした視覚を失った状態を想像するだけで，その暮らしにおける困難さに気付く。さらに，目の不自由な状態の疑似体験によって，その暮らしにおける困難さを実感し，目の不自由な方とその暮らしを危惧する思いをもつ。

言葉の道案内とは，地図や画像を理解することが困難な目の不自由な方を対象とした，言葉や音声による道案内である。主に駅の構造やバス停の位置，またそこから主な施設への経路を表したもので，パソコンや携帯電話等の音声読み上げ機能によって音声案内となるものである。一人での外出を支えるため需要がある一方で，普及しているのは都市部の主要駅が中心であり，前橋市内の施設に関わる言葉の道案内はないのが現状である。

子どもたちはこれまでのくすの木タイムの学習で，特別支援学校の子どもたちと交流することで，相手の状況や思いを推し量って関わり，心を通わせることの充実感を感じてきている。一方で，身体障害者の方と交流をした経験のある子どもたちは少なく，その暮らしを想像したり体験したりした経験も少ない。このような子どもたちにとって，目の不自由な方の暮らしを体験しその困難さを知ることは，自分たちにできることをしたいという必要感をもつことにつながる。

言葉の道案内を追究することは，目の不自由な方とその暮らしを多面的に考えることになる。また，作った言葉の道案内を評価してもらったり，ガイドヘルプのやり方を教わったりすることで，目の不自由な方や福祉会館の方，友達と協働して取り組む経験を重ねることができる。さら

に，使いたくなる言葉の道案内を検討する中で，方向や距離の伝え方，伝える順序等の解決方法について,分かりやすさや安心できるといった面から分析的に見ることを繰り返すことができる。そして，解決が難しいこの問題の解決に向けて他者と協働して取り組み，その成果を共有することは学級集団や地域の一員としての自信をもつことになる。

これらの探究を通して，子どもたちは，誰もが暮らしやすい社会の実現には，単に暮らしを支える人やものを充実させることや親切心の押しつけではなく，相手の思いを推し量り，互いに相手の思いを尊重して関わることが重要であるといった概念的な理解に至り，今後の生活に生かそうとする思いをもつことができる。

(4)今後の学習

ここでの学習は，５年「広がれ！うんまいおきりこみ」において，子どもたちが前橋市の郷土料理であるおきりこみのレシピや発信方法を検討し，前橋市への愛着を深める学習へと発展していく。

２　児童の実態及び指導方針

子どもたちは，４年「広げよう！友達の輪」において，特別支援学校の子どもたちとの交流を通して特別支援学校の子どもたちの特徴・よさを理解することで，相手の状況や思いを考えて他者と関わることの大切さを体験的に学んできた。この学習の中で明らかになった子どもたちの実態及び本単元を進めるにあたっての指導方針は，次のとおりである。

①　特別支援学校の子どもたちと繰り返し交流をすることを通して，特別支援学校の子どもたちの特徴・よさを理解してきている。このような子どもたちが，目の不自由な方とその暮らしの特徴・よさを理解できるように，目の不自由な状態の疑似体験や言葉の道案内の製作・試し，目の不自由な方へのインタビューを繰り返し設定する。

特別支援学校の子どもたちとの交流に向けて，活動内容をピラミッドチャートで序列化したり統合したりして選択できるようになってきている。このような子どもたちが，言葉の道案内の内容等を比較することや関連付けることができるように，ウェビング図やＰＭＮ等のシートを選択したり自分で枠を作成したりする機会を設定する。

②　特別支援学校の子どもたちとの交流について見いだした課題について根拠のある解決方法を導けるようになってきている。このような子どもたちが，目の不自由な方とその暮らしについて見いだした課題について明確な根拠のある解決方法を導けるように，課題を解決した状態の具体図と，互いの解決方法を可視化して共有・検討する，ウェビング図やＰＭＮ等のシートの用意をする。

③　特別支援学校の子どもたちとの交流を通して，特別支援学校の子どもたちや関わる人たちへの関心や，課題の解決への自信をもてるようになってきている。このような子どもたちが，目の不自由な方との関わりや言葉の道案内の製作・試しを通して，目の不自由な方とその暮らしへの関心や，課題の解決への自信をもてるように，活動ごとに自己貢献度について他者評価をもらう振り返りシートを読み合う機会を設定する。

Ⅲ　目標及び評価規準

Ⅳ　指導計画　　※Ⅲ・Ⅳについては，指導と評価の計画参照

Ⅴ　本時の学習

１　ねらい　作った言葉の道案内の安心したこと(Ｐ)と不安感が残ること(M)について話し合うことを通して，複数のＰやMを基に，「使いたくなる言葉の道案内」にふさわしい，言葉の道案内の改善方法(N)を導いている。

２　準　備　振り返りシート　ＰＭＮの枠　付箋紙　「使いたくなる言葉の道案内」の具体図

３　展　開

学習活動と子どもの意識	指導上の留意点

1　本時のめあてをつかむ。

・試してくれた友達からは「曲がる方向」は分かって安心したけど，「歩く距離」が「ちょっと進む」の案内だと距離が分からなくて不安だと言われたな。他にも「いつ目的地に着くのか分からなくて不安」に思った友達もいたんだな。

・友達が前回の活動でのぼくの発言がよかったと書いてくれ，嬉しいな。今日も頑張りたいな。

・安心したことや不安感が残ることを話し合って，使いたくなる言葉の道案内にしたいな。

2　言葉の道案内を試してみて安心したこと(P)と不安感が残ること(M)を班で共有し，改善方法(N)を話し合う。

安心したこと（P）	不安感が残ること(M)
・左や右に直角に曲がる ・聞き直しやすい。 （1～・2～・3～の番号）	・曲がる場所 ・歩く距離 (「ちょっと進む」だと△) ・「斜め右」がどのくらいか分からない ・いつ目的地に着くのか分からなくて不安

・「左や右に直角に曲がる」っていうのは，直角だから分かりやすかったのだろうな。

・「聞き直しやすい」と言ってもらえてよかったね。『1～・2～・3～』と順番をつけて，途中で分からなくなってもそこから聞き直せるように考えた工夫だものね。

・「斜め右がどのくらいか分からない」というのは，確かにそうだね。でも斜め右以外に分かりやすい説明の仕方ってあるのかな。

・友達の言うように,アイマスク体験をしたとき,お皿の位置を「何時の方向」って伝えたな。これなら細かい方向が分かって安心できたから,言葉の道案内でも使いたいな。

・友達の言うように，始めに目的地のだいたいの方向と距離を伝えたら始めの一歩も安心できそうだね。ガイドヘルプの時も始めにこれから行く場所のだいたいの方向と距離を伝えてもらうと安心できるから，同じようにできそうだね。

3　本時の学習のまとめをする。

・その人の立場になって考えるとNを見つけやすかったな。直せたら実際に駅で試したいな。この言葉の道案内で「一人でも出かけようかな」と思ってくれるといいな。

○言葉の道案内を試してみて，安心したこと(P)と不安感が残ること(M)についての友達との認識のズレや，課題の解決への自己貢献度に気付けるように，班で前時の振り返りシートを読み合うよう促す。

○ＰやMを話し合って，言葉の道案内の改善方法を明確にするという本時の見通しをもてるように,「使いたくなる言葉の道案内」の具体図を提示し，本時取り組むことを問いかける。

○試した友達と，その様子を見ていた自分たちがもったＰやMを共有できるように，前時に書いたＰやMの付箋紙をＰMの枠に貼るように促す。

○使いたくなる言葉の道案内に必要な要素を共有できるように，Ｐに書かれていることとそれが安心することに繋がった理由を紹介し合うよう促す。

○ＰやMを基に，言葉の道案内の改善方法(N)を考えられるように，Mを改善するための工夫を枠に書き込むよう促す。

○食事の介助やガイドヘルプのやり方で安心に繋がった方法を想起しNに生かせるように，アイマスク体験での感想をまとめた模造紙の中から,安心した方法を問いかける。

○本時までの課題の解決状況を把握し，今後の活動について考えられるように，振り返りシートを用意し,「使いたくなる言葉の道案内」の具体図に照らして，シートを記入するよう促す。

評価項目

作った言葉の道案内の改善方法（N）の根拠を，複数のＰやMを用いて記述したり発言したりしている。

＜学習プリント・発言②＞

○今後の追究への意欲を高められるように，今回の活動で大切と感じたことや，今後の活動を見通した思いや，実際に現地で試してみたいという思いをもてたことを称賛する。

指導と評価の計画（全３０時間）

目標	目の不自由な状態の疑似体験をし，目の不自由な方やその暮らしを支える人やものについて調べ，目の不自由な方が安心して暮らすために自分たちができそうなことを考えて実践することを通して，目の不自由な方やその暮らしを支える人やものの充実に加えて，相手の思いを推し量り，その思いを尊重して関わることが重要であるといった概念的な理解をし，相手の状況や思いを考えながら様々な人と関わることを大切にする態度を養う。
評価規準	①（知識・技能）目の不自由な方や言葉の道案内の特徴・よさを理解している。 言葉の道案内の内容を比較したり音声案内が必要とされる背景を関連付けたり多面的に見たりすることができる。 ②（思考力・判断力・表現力等）目の不自由な方が安心して暮らすためのものについての課題を設定したり言葉の道案内について調べたり言葉の道案内の特徴・よさを根拠として解決方法を導いたり発信したりしている。 ③（主体的に学習に取り組む態度）目の不自由な方や，その暮らしを支える人やものを調べたりできることに取り組んだ経験から，他者と関わることへの関心や自信をもち，相手の状況や思いを考えながら様々な人と関わることを大切にしようとする思いや願いをもっている。

過程	時間	学習活動	指導上の留意点	評価項目＜評価方法（観点）＞
出合う	1	○前単元で関わってきた対象を基に，対象に求める条件について話し合う。	○前単元での探究の経験から探究のよさを想起できるように，前単元での具体的な活動とその時の成果が分かる振り返りシートや写真を提示する。	◇対象に求める条件として，人の役に立てることや試行できることといった，これまでの探究の経験を基とした思いを記述したり発言したりしている。 ＜学習プリント③＞
	4	○対象の候補を挙げ，それらについてwebサイトや図書資料，上級生や身体の不自由な方へのインタビュー，アイマスク等を用いた疑似体験を行う等で調査をし，対象を決める方法を話し合う。	○目の不自由な方や耳の不自由な方，手足の不自由な方等の身体の不自由な方から対象を自分なりに決め，暮らしや思いへの疑問や役に立ちたいという思いをもてるように，アイマスク等をして歩行や給食等の日常生活を疑似体験する場を設定する。	◇対象にしたいものを自分なりに決め，その理由として人の役に立てることや試行できることといった，対象に求める条件を記述している。 ＜学習プリント②＞
	2	○対象にしたいものとその理由を話し合って対象を決める。 学習のめあて：暮らしを支えるものを作って，目の不自由な方がより安心して暮らせる街にしよう。	○対象の候補の目の不自由な方や耳の不自由な方，手足の不自由な方について，それぞれの特徴・よさを比較できるように，対象に求める条件の具体図と，マトリクスの枠を用意する。	◇目の不自由な方を対象に決めた理由として，支えるものが繰り返し試行できそうなことや講演でお世話になる目の不自由な方の役に立てそうなこと等，対象に求める条件を根拠に記述している。 ＜学習プリント②＞
さぐる・まとめる	1	○目の不自由な方の暮らしについての気付きや疑問を話し合って，課題をつかむ。 課題：目の不自由な方が使いたくなる言葉の道案内は，どのようなものだろう。	○目の不自由な方が街を歩く手助けになるものとして作るものを決められるように，目の不自由な方へのインタビューで「意外だったこと」の視点を提示する。	◇目の不自由な方がより公共交通機関を安心して使えるようにしたいという思いを基に，これから取り組みたいことを表している。 ＜発言・学習プリント②＞
	1	○課題の解決に向けて，言葉の道案内づくりに必要な活動を話し合い，班分けをして活動計画を立てる。	○課題を解決した状態を具体的に想定できるように，使いたくなる言葉の道案内の特徴・よさを整理してまとめる模造紙の用意をする。	◇言葉の道案内の特徴・よさを記述したり発言したりしている。＜学習プリント・発言①＞
	1	○班ごとに言葉の道案内の原稿を作る。	○案内する場所を具体的にイメージできるように，前橋駅のバスロータリーの地図と写真を用意する	◇言葉の道案内の原稿を作っている。 ＜学習プリント①＞

	3	○アイマスクをして，作った言葉の道案内を試し，改善策を話し合う。（本時３／３）	○試してみて，安心したこと（Ｐ）と不安感が残ること（Ｍ）を基に言葉の道案内の改善方法（Ｎ）を考えられるように，課題を解決した状態の具体図とＰＭＮの枠を用意する。	◇作った言葉の道案内の改善方法（Ｎ）の根拠を，複数のＰやＭを用いて記述したり発言したりしている。 ＜学習プリント・発言②＞
	2	○作った言葉の道案内の内容を改善する。	○使う人の気持ちになって内容を改善できるように，目の不自由な方へのインタビューや疑似体験で感じた目の不自由な方の思いをまとめた模造紙を掲示する，	◇使う人の気持ちになって考えることの難しさや大切さについて記述している。＜発言・学習プリント①＞
	2	○作った言葉の道案内を現地へ行って実際に試し修正する。	○作った言葉の道案内が現地で安全に使えることを確かめられるように，前橋駅のバスロータリーの「段差」「人の通り道」の視点を提示する。	◇作った言葉の道案内の特徴・よさを記述したり発言したりしている。 ＜学習プリント・発言①＞
	1	○完成した言葉の道案内を目の不自由な方に聞いていただき，評価をもらい，新たな課題をつかむ。 課題：目の不自由な方の来校に向けて，自分たちにできるガイドヘルプはどのようなものだろう	○目の不自由な方からの感想を基に課題の解決状況を評価できるように，課題の解決した状態の具体図を用意をする。	◇目の不自由な方からの感想を基に，これから取り組みたいことを記述している。 ＜学習プリント③＞
	3	○目の不自由な方が安心して来校することに向けて，ガイドヘルプを友達と交代しながら試す。	○ガイドする相手の思いを考えられるように，ガイドヘルプのやり方についてガイドした相手からチェックシートを基に評価を聞く活動を設定する。	◇ガイドする相手の思いを基に，ガイドヘルプのやり方の工夫を発言したり，ガイドヘルプをしたりしている。 ＜発言・行動①＞
	3 ＋ 行事	○目の不自由な方をガイドヘルプし，講演を聞く。	○目の不自由な方の代行感覚の鋭さやそれを得るまでの努力に気付けるように，感想を記述する際に「意外だったこと」の視点を提示する。	◇目の不自由な方の代行感覚の鋭さや，それを得るまでの努力について，感じたことを記述している。 ＜学習プリント①＞
生かす・ひろげる	1	○言葉の道案内だけでは十分でない場面を知り，目の不自由な方がより便利に安心して生活するために必要なことを話し合う。	○相手の状況や気持ちを考えながら関わることの重要性に気付けるように，言葉の道案内があっても困る場面を紹介する。	◇相手の状況や気持ちを考えながら関わることの重要性について記述している。 ＜学習プリント③＞
	2	○これまでの取組をまとめ，単元全体の学習を振り返る。	○目の不自由な方やその暮らしを支える人やものに対する見方や考え方の変化や自らの成長を自覚できるように，これまでの学習を振り返って今までの自分と今の自分とを比較して気付いたことを話し合う活動を設定する。	◇相手の状況や気持ちを考えながら様々な人と関わったり支え合ったりすることの大切さ等の，目の不自由な方やその暮らしを支える人やものに対する見方や考え方の変化や自らの成長した点について記述している。 ＜学習プリント③＞